

お墓に関する

高橋泰正師語録

仏と墓の研究者

高橋泰正

墓作りに思う

墳墓は、ただ人生の通過儀礼の標識だ。というような単純な理解だけではすまされないもっと重要な意義を私達の生活に持っている。それは時には心の故郷であり、祖霊との魂のふれあいの場であり、私達の生存の確認のあかしでもある。悠久な過去から永遠の未来につながる、目にはさだかに見えないが、しかし断つことのできない長い心のきずなの象徴である。それが正しく建てられ、絶えぬ供養を受けているとき私達の心も安らぎ、暮らしも満たされて明日への希望と活力が得られる。

祖霊の加護ということよりも、私らが人として当然であるべき心の原点を見失わない悦びがそこにあるからだろう。魂は自己を中にして、前世から来世へ連続しているものであり祖霊は、その自己を生んだ母胎、やがて自己も来世の為にはその母胎の一つとなる。その具象的な標識が墳墓である。当然これが私らの心の暮らしの中心であるべきだし、これを正しく護持することは、ただ祖霊を畏敬奉拝するためだけではなく、自己の人間回復、そして一家一門の繁栄の起点となると信じたい。

そうであるから墓は私らにはかけがいのない大切な心のよりどころなのである。それは壮大であるから好ましくないのではない。善美をつくしたのが望ましいのでもない。ただ私らの伝統的な信仰に従って正しく建てられなければならないのである。正しく建てるとは、墳墓は祖霊と私らとの触れ合いの場である条件を満たしたものでなければならないということである。その条件とは、正しく供養の意味を具足したものを言う。供養の意味を正しく具足し、かつ形制を伝統的信仰にとった墓がいかに少ないか、ということは私らが周辺を注意すれば直ちに発見できることである。それを直ちにその一家の浮沈につなげることは即断かもしれないが、心のつながりを忘れた墓はただの物質であって、当然私らの心の支えとは無縁である。この支えを失った心の充満が、今の社会悪や一家の悲劇を招くものとの一つであると考え、あながち不当ではないと信じる。

合 掌

各宗派の教理に則した価値ある墓づくりとは

現在、お墓について書かれている本は書店へ行けば簡単に手に入れる事ができます。

しかし、その内容については満足できるものは少ないでしょう。私達はお墓について考える時にまず、第一に墓に誰を祀るのか、祀られる者は誰に葬送儀礼を受けているのか、またその後の法事などの時は誰にお経をお願いするのか、一般的には亡くなった身内の方の遺骨を安置し、魂を祀り、菩提寺の住職の葬送儀礼を受け、(神葬祭の場合は神主)あの世へと旅立っていきます。

その後の供養も菩提寺に託されています。そこで、お墓と菩提寺の属する宗派の教えの真髄である葬送儀礼精神、供養の心に即したお墓づくりをすれば、仏も迷うことなく菩提寺の住職も納得し、施主も満足できるのではないのでしょうか。各宗派の教えを取り入れた葬送儀礼については、天台宗の「法華三昧」「常行三昧」「光明供錫杖」「崇拜の対象となる仏への供養と、仏の性を有する自己自身の心の開発」、真言宗の即身成仏を教え導く葬送、浄土宗系の阿弥陀如来の本願慈悲力に報謝することによって浄土に往生できると説く教え、各宗派の葬送儀礼は宗派の根本となる教理によって、往生、成仏を願い死者を導いている。その後の追善供養についても浄土真宗では一般的な考えでの冥福を祈り、菩提を弔うといったような意味はなく、すでに阿弥陀如来の本願によって極楽往生しているのであるから阿弥陀如来への感謝であり、それがそのまま、自分の人生を見つめなおす場であるとされています。真言宗の場合には宗祖弘法大師が詠んだとされる「阿字の子が、阿字の古里立ち出でし、また立帰る、阿字の古里」とあるように阿字とは阿字であり本尊大日如来を表す種字であり、すべての生命は大日如来の世界より生まれ、大日如来の生命に包まれた弥勒菩薩の都率浄土へ帰るとされ、(帰る)また亡者の霊が引導によって無事にしかも速疾に浄土へ帰るために、お大師様の慈徳を戴いたり、子供の場合には自力不足であるから地蔵菩薩の助けを戴いたりするのである。

追善供養では四十九日迄を中陰といい、各菩薩、如来の加護と功德力により、過去に造った罪業を洗い落とすとともに、親族の修する供養の功德によって成仏への旅を続けるのである。これは実際にあった話ですが菩提寺が浄土真宗の檀家で子供が亡くなり、遺族は急いでお墓をと、知人に紹介された石屋さんに頼みました。何日かして工事も終り、墓前でお経を上げてもらおうと和尚さんを伴って来ますと、和尚さんは墓所へ行ってビックリ、

水子地蔵が建てられていたのです。

真宗では水子供養など教えのなかにはありません。この話などは施主も工事をした石屋も宗派の教理など眼中になかったために起こった出来事であるが笑えない事実です。常々相談に来られる人に対して、私の第一声は「菩提寺は何宗ですか」と聞きますと、ほとんどの人は「〇〇宗です」と答えられますが、その教えはと問うと「よくわかりません」の答が返ってきます。石塔の色がどうの、形がどうの、墓相だ石相だ、良い墓、悪い墓なんていうまえに誰を祀り誰にお経を上げてもらい、誰が供養の施主になるのか考えて下さい。

真の良いお墓とは、祀る者(遺族)祀られる者(仏)、司祭する者(僧職者)が充分納得し得る。死者の受けられた各宗教理に基づいた葬送儀礼の精神を尊重したお墓こそ、真の良い墓であり、その墓をつくり、供養することこそ、真の心のこもった供養である。

合 掌

「墓を建てることこそ孝の極致」

昔より「親の墓も満足に建てられない親不孝者」などといわれます。親孝行したい時には親はなし。世の中うまくいかないものです。最近では親孝行という言葉も非常に少なくなり自己主張のみが独歩ひとりあるしているのではないかと感じられます。二世帯住宅などと親夫婦と息子夫婦と一緒に住むのに玄関、台所が別々、居室も当然別ですが、豊かになってしまった日本人の後遺症みたいなものです。そのうちお墓も同一所帯なのに入口は別々なんてことになるかも知れません。

親孝行、親の恩については「父母恩重經」に父に慈恩あり、母に悲恩あり、人はこの世に生きるのは宿業を因とし父母を縁となす。父に非ざれば生ぜず母に非ざれば育たず氣を父の胤たねに稟うけ形を母の胎に托す。この因縁を以ての故に、悲母の子を念うこと世間たぐいに比あることなしと始まり出産、幼児期に受ける恩、母の懷を寢所となし、母の膝を遊び場とし、母の乳を食物とし、母の情けを生命とする。飢えたる時、渴く時、寒い時、暑い時、母は子の為に飲まず、食わず、着ず、脱がず、子供の為にすべてをなす。その為に母がいなければ、養われず、育てられず、母の乳を飲む事こく一百八十斛、父母の恩重きこと点の極りが無きが如し、母が他所に傭われて仕事をしていても、吾子が家で泣いていると思えば胸さわ悸おどろぎ、心驚き、両乳流れ出でて、忍び堪たうること能あたわず、すぐ家へ戻ってみると子供は母の姿を見て喜び、嗚呼して母に向かう、母は子の為に足を早め、身を曲げ、手をのべて子供の衣服についたチリを払い吾子に口を接けつつ乳を出してこれを飲ませる。この時、両情一致して恩愛あまねの治きこと、これに過ぎるものなし。やがて三才になれば乳を離れる。父母、他に出て、おいしいもの得れば、自分で食べずに家にもち帰り、吾子に食べさせ、また衣服は新しい着物は子供に着せ、父母は破れた着物を身にまとう。と幼児期の恩を示し、更に別して父母の十種の恩、壞胎守護かいたいしゅごの恩、壞胎守護りんしょうじゅくの恩、臨生受苦しんしょうじゅくの恩、生子忘憂しんじぼうゆうの恩、乳哺養育にゅうほよういくの恩、廻乾就濕かいけんじゅうしつの恩、洗濯不淨せんかんふじょうの恩、洗濯不淨せんく とかんの恩、嚙苦吐甘いごう あくごうの恩、偽造悪業おんぎょうあくねんの恩、遠行憶念くぎょうれんみんの恩、遠行憶念の恩、究意憐愍の恩を示し、重ねて「偈」に

一、悲母子を胎めば、十月の間に血を分け肉を頒ちて身重病みじゅうびょうを感ず、子の身體からだこれに由りて成就す。

二、月満ち時到れば、業風ごうふうさいそく催促して偏身疼痛からだじゅういたみ、骨節解體ほねふしかいたいし惱亂のうらんして、忽念こつねんとして神心たましいを亡ぼす。

三、もし平安とならば、猶蘇生なおそせいし来るが如く、子の声を発するを聞けば、己も生まれ出でたるが如くなり

四、其初めて生みし時には、母の顔も花の如くなりしに、子を養ふこと数年なれば容乃かたちすなわち憔悴やつれをとらふ。

五、氷の如き霜の夜、雪の暁にも、乾ける處かわに子を廻しところ湿うるへる處に己れ臥す。

六、子己が懷こに尿おのまり、域しは其衣あるいに尿そのきものまるも、手自ら洗い濯ぎて、臭穢またなきものを厭いとふことなし。

七、食味を口に含めて、これを子に哺ふくむるに、苦き物は自ら嘸のみ、甘きものは吐きて興おふ

八、もし子の為に、止むを得ざる事あれば、身みづから悪業を造り、悪趣おに墮つることを甘んず。

九、若し子遠く行けば、歸りて其面そのかおを見るまで、出でて入りても之を憶おもひ、寝てもさめてもこれを憂うれふ。

十、己れ生ある間は子の身に代らんことを念おもひ、死に去りて後は子の身を讓まもらんことを願ふ。

このような恩徳に子はどう報いたらよいか、父母の恩、如何にして返せるか、生前に返せる人などは幸せである。死後三十三年忌が来ても、まだ何も出来ない「生きている人が優先だ」などといって。

書家の相田みつを氏の文に「そのうち」というのがあります。「そのうちお金がたまったら、そのうち家でも建てたら、そのうち子供から手が放れたら、そのうち…そのうち…そのうち…と、出来ない理由をくりかえしているうちに、結局は何もやらなかった。空しい人生の幕がおりて、頭の上に淋しい墓標が立つ、そのうち、そのうち日がくれる。いまきたこの道かえれない」

お墓づくりも、まさにそのとおりである。そのうちにやろうでは一生かかっても出来ない。親の墓も建たない。父母恩重經に示された十恩に報いずにあの世に旅立ってよいものか、親の生前に出来るなら孝行すべし、親の死した後は自分の全財産を掛けても、親の墓くらい建て、ねんごろに供養しても良いのではないか。全財産を掛けても、親の供養をすることによって供養の功德が廻って来る。新しい道が開けてくるものである。戦後、家族、家に対する意識は変わった。しかし、家族の絆は孝の精神は永遠へ続く子孫に確かな形で伝えておきたい。それには墓をきちんと建て、真摯なる心で供養することこそ亡父母に対する孝の極致ではないか。

合掌

お墓を建立する時期は？

よく、お墓は何時建てたらよいのかと聞かれますが一口には答えられません。それはその人その人によって違うからです。まず分家してお墓のない家の場合「思いついた時」「出来る時」に造るのが一番よいのです。死は予期できません。いざなにかあった時に、慌てることになり、その結果として四十九日の忌明けも過ぎたのに遺骨はまだ仏壇に、仕方がないから菩提寺に預ける、本家の墓地に一時埋葬させて貰うかと聞くと迷惑顔、あたりまえです。分家した時すでに、その墓には入れないことなのですから。

こんな事態になって「あゝ、あの時に造っておくのがよかった」ということになります。家の為精一杯働いてあの世へいった人に対して、これではいかにもになってしまいます。

分家初代の家のお墓はまず墓地さがしからはじめるのですが、本家の宗旨と同じ宗旨のお寺をさがし、そのお寺の檀家となって適当な広さの墓地を分けて貰い、そこを墓所と定め境界石を設け本家の墓地の土を一握り貰ってカロートの内に納めて石塔を建てます。また本家を相続された人は、先祖伝来のお墓を守っていかなくてはなりません。古いお墓は訳の解らぬ墓石が乱雑に建てられ文字の読めないものや、半分に割れたもの、傾いてしまったもの、このままにしておけば後世の子孫にはなにがなんだか分からなくなってしまうでしょう。家の古い歴史、家柄はお金では買えません。それを後の世に伝えなければなりません。その為には古い墓所を整理しておくことです。古いお墓にはカロートはないのが普通です。よくカロートだけでも造らなくてはと言いますが墓所のスペースが十分な場合は「夫婦墓」「単独墓」「仏像墓」に祀られるほうがよいでしょう。その場合にも境界石で他家とのしきりをきちんとつけておくことを忘れぬように。

それに何代も続いている家は色々な因縁が深いので、供養塔を建てることをすすめています。供養塔を正しく建て、祀ることによってその家の因縁も次第に消えていき家運も上昇し、安穏な生活ができる家になるでしょう。夫婦墓は残された一方が主体になり相続者の名前で三年忌まで建立するのがよいでしょう。「地藏十王経」に説かれている冥界の裁判においても現世の遺族の供養の有無によって亡者の行方が決定されます。

三回忌の裁判では五道転輪王（本地、阿弥陀如来）が裁判長です。阿弥陀如来は、よく追善をなしてよくよく菩提の成仏を祈るときには、成仏、解脱を得させて冥界よりお救い下さいます。この三年忌を逃すと、この先は七年忌になってしまいます。塔を建て供養するのは、計り知れぬ功德があり、それを行うのは現世の遺族です。

合掌

供養と五輪塔

供養とは仏、宝、僧の三宝や故人の霊に対して供物などをささげ冥福をいのることです。経典には三種供養、四種供養、五種供養、十種供養などがありますが、現在祖霊に対する追善供養などが一般的には供養といわれています。供養は慈悲のところであり、今は自分が祖霊に対して追善供養をつとめていますが、将来は自分が子孫からの追善供養を受けることを自覚しなければなりません。そして供養は追善供養にとどまらず、自己の修養供養、家の因縁供養もふくまれているのです。

供養の具体的な方法としては、造寺、造仏、造塔、写経、読経礼拝があります。このうち造寺、造仏は我々一般の人達には荷が重すぎてもちあがりません。しかし、造塔（塔をたてる）写経（経文をうつす）読経礼拝（仏を礼拝し、仏前にてお経を声をだして読む事）この三種の供養は自分さえその気になれば可能になります。私達のまわりでもこれらの供養が古い時代よりくり返し、くり返しおこなわれております。

私達は日常の生活のなかでも種々の罪を犯して生きています。殺生、嘘、数えあげればきりがありません。祖霊もかつてこの世にいた時には今の私達と同様にたくさん罪を犯していました。この罪障は、現在この世に生きている子孫にも影響がいろいろなかたちであらわれております。死後の霊界にあっては、生前に犯した罪障のために、祖霊は必ず苦界に墮とされます。（生前に悟りを得た祖霊は別ですが）そのために永遠の仏の世界へ移ることも、子孫を守護し導くこともできません。この苦界に沈み迷っている祖霊を浮かび上がらせ成仏道へ導くことが遺族や子孫の勤めであり感謝、恩返しなのです。そのためには追善供養をおろそかにできません。

追善供養をされない祖霊は苦界においての責苦にたえかねて、時には現世の遺族や子孫にすがることもあります。これは大海をいく小船が船底に付着した貝がらや小虫や藻のために速力が鈍くなり、やがては沈んでいく様に遺族や子孫の生活や健康にも支障がでてきます。また家族を凶禍から守ろうといろいろな方法で知らせますが、（夢、偶然そうなったなどという事）現世の遺族や子孫には気がつかないために、ついに凶禍に遇ってしまうことが多くあります。

追善供養の具体的な始まりは初七日より四十九日、百ヶ日、一周忌、三周忌、七年忌、十三年忌、三十三年忌、（三十三年忌をもって忌あげとされています）この間、霊界での十王、十三仏、祖霊、の関係は58年7月配布の弊社のチラシに掲載済になっています。

また、十王のなす呵責のようすは（地蔵十王經）に説かれています。

よく、墓所でみかける卒塔婆は供養のための最善の塔である〔五輪塔〕の簡略化されたものであり、板塔婆の功德は当日限り、角塔婆は五年、石の五輪塔の功德は形ある限り、それは永久とってよいでしょう。

最近五輪塔の建てられている墓所を見かけますが、唯、建ててあるだけ、梵字がちがっている、建立意義がわからない五輪塔を模した塔を建てられている家があり、人ごとながらハラハラしています。五輪塔の四面は法門が定められていて、その法門を示す梵字が刻まれているなければなりません。この法門とは正面より発心の門、修行の門、菩提の門、涅槃の門といわれ、この四方四門は靈界においては、祖靈が成仏道へ進んで、成仏解脱を得る導きとなり、現世における私達にとっては人間修養の道とされています。つまり、発心の門とは祖靈が仏の世界にすすもうとする法門で、人が悟りを得ようと心をおこすことにあたり、現世では邪心のない無心の時でもある誕生の時であります。修行の門とは祖靈が生前の罪障や罪業を浄めて自己の個性を脱するためにつとめる法門であり、現世では人が我欲、煩惱をすてさり、正覚を得ようとつとめることであり、ひとの一生の大半を占めるといえます。菩提の門とは、祖靈がさらに成仏道を進んで解脱をもとめて極楽に往生成仏の証果を得る法門であり、現世では貧、瞋、痴の三毒を断ち切った悟りの境地に達することにあたります。涅槃の門とは、もう永遠の仏の世界であり、九品蓮台への法門であり、祖靈は仏の世界へは行って、成仏、解脱でき、仏の世界より現世の子孫、遺族を守り、導くことができます。

五輪塔の各輪にはそれぞれに深遠な意味があり上部より、空、風、火、水、地、とあり、これは、宇宙自然界の根本原素であり、この五大の集散、離合、輪転によって万物が生じ滅します。五輪塔の姿こそは、宇宙自然界の真理をあらわしています。昔の人は五輪塔はそのままが仏様の身形であり、人の身形であり、世界の姿である。万徳が備わって欠けたところがないから輪という。五輪塔を一基建てれば仏像を建てたのと同じ功德があり、その功德によって、亡者がたとえ三悪道〔地獄、餓鬼、畜生〕におちて苦しんでいようとも、その功德によって仏様のいる浄土に往生することができる。と信じられておりました。

このように、功德のある五輪塔ですからこそ、正しく建立し正しくまつることによってはじめてその功德があらわれてくるものなのです。五輪塔は正しく建てれば薬になり、その建て法を誤れば逆に毒にもなりうるのです。

合 掌

墓所と五輪塔

世の中にこれだけ大勢の人が存在しておりますが、これだけの人達が必ずどこかの家につながり、先祖に連なっています。ですから、今どんなに幸福であっても、明日は今日と同じかという、それは解りません。私達は遠い過去より未来への一接点に生きています。

よく「私は分家初代なので、仏様もないし先祖はありません」などという人がおりますが、先祖がなくてこの世に生まれるひとは決してありません。私達は、父方の先祖の因縁、母方の先祖の因縁を背負って生きているのです。

因縁とは「物事を成立させる素因」つまり因と因を育てて、果を結ばせる力、即ち縁とによって定められた生滅の関係を因縁といいますが、先祖に関係する因縁には善因縁と悪因縁があり善因縁の強い家は、家運が向上し、悪因縁の強い家は、逆に沈下してしまいます。悪因縁のなかには怨霊も含まれますが、特に先祖が武家の家系ではそれが強くあらわれる場合があり、俗に「先祖のたたり」といわれるものにはこの怨念による場合が少なくありません。これらの悪因縁から子孫を護るのが、成仏解脱をした先祖、即ち祖靈なのです。しかし追善供養をなされていない家の先祖は、成仏解脱ができていないので、残念ながら子孫が悪因縁や怨念によって、いたぶられる結果となってしまいます。

では、先祖の成仏解脱を願うには何をしたらよいのかというと、遺族が追善供養を正しく行うことであり、その供養の意味を正しく伝える五輪塔を建立するが良い方法なのです。最近五輪塔を建立される家も増えていますが、五輪塔の持つ真理を無視してあったり、間違った梵字を彫って建てたり、無茶苦茶としかいいようのない五輪塔（形ばかり）を見かけます。ちなみに五輪塔の四門はなぜあるのか申しますと、発心の門、修行の門、菩提の門、涅槃の門、等の各門は故人の靈魂が仏心を起こしてから成仏をして解脱を得るまでの道を示すものであり、導きとなるのである。また、四門に彫られる二十字の梵字は、各々に神智仏徳が含蔵されているものなのです。ですから五輪塔はまず建立者の話をよく聞いて、五輪塔に熟知した者が企画をする。間違っ建てられた五輪塔はただの石のカタマリでしかあり得ません。ですから先祖に対する心よりの追善供養と、正しい建て法による五輪塔によって、先祖に成仏解脱を促し、現世の子孫を悪しき因縁より護ってもらい、現世の安隱、未来の希望、家運向上等、五輪塔を建立するという事は、計り知れない福德があります。

墓所に五輪塔のない家でもこの機会に是非計画を……。

合 掌

「墓前のお供え物」

よくお墓参りに行きましてお供物、お花などを墓前に供えたまま帰ってしまいますが、墓前に供えられたお供物は、仏様はたべません。「仏説無量寿経」には「もし食せんと欲する時、七宝の盛器、自然に（かれの）前に在り。（例えば）金、銀、瑠璃、瑪瑙、珊瑚、琥珀、明月、真珠、（よりなる）かくの如きもろもろの盛、意に随って至る。

百味の飲食、自然に（その中に）盈満す。（しかるに）この食ありといえども、実に食する者なし。ただ色を見、香をかぎ、意に食すと以え、自然に飽食す。心身柔軟にして味箸するところなし。事おわれば（盛器も飲食）も化に去り、時至ればまたあらわれる（岩波文庫「浄土三部経」）と説かれています。仏の世界では実際に食べるのではなく、ただ色を見、香をかいであじわうことなのです。

一度、墓前にお供えしたものは、おさがりとして関係者がいただいた方がよろしいでしょう。「仏前の献飯は、仏に侍する比丘食する事を得、若し比丘なき時は、白衣（一般人）仏に侍すれば、亦食するを得」と「善見律毘婆沙論」にあるように、供え物のおさがりをいただくことは結構なことです。墓参りの際には帰った後のことまで考えて、必ず墓前はきれいにしておく事がよいでしょう。

「廻向文」

願以此功德 普及於一切

我等興衆生 皆共成仏道

「願わくは此の功德をもって、普く一切に及ぼし、我等、衆生とを皆共に仏道に成ぜんことを」

読経の終わりに必ずといってよいほどこの文句を聞きます。これは「法華経化城喻品」からとった文ですが、浄土宗系では「観経玄義分」序の

願以此功德 平等施一切

同発菩提心 往生安樂国

「願わくは此の功德をもって、平等一切に施し、同じく菩提心を発して、安樂国に往生せん」を唱えています。この違いは、自力門と他力門の違いですが、自らの菩提のため、また死者の往生、成仏を願うために唱えられます。「この廻向文も、（法華経）（観経玄義分）」序のなかでは、それ相応の意味をもつと思いますが、この「廻向」ということも専門的には至心廻向や二種廻向（往相・還相）や三種廻向（菩提・衆生・實際）などと説かれますが、我々一般人は我等と衆生」はさておいて、自分の肉親や親しい人が死後、地獄へおちて苦しまないよう早く成仏して、安樂国に往生させてほしいと願って、墓参りの際には必ずこの廻向文を最後に唱えることです。

合掌

「墓所雑感」

以前にある調査機関が首都圏に住む20歳以上の学生、会社員、主婦などを対象に実施した「お墓に対する日本人の意識」についてのアンケート結果では、全体の84%が墓参りと彼岸を連想すると、答えています。毎年墓参りをするという人は、51%、お墓が遠くて墓参りは難しいが出来ることならしたいと答えた人も含むと、82%にもなります。20代の人では、その67%が毎年墓参りをする答えており、新人類と呼ばれている若者も、思わぬ一面を見せている。親、祖先を尊ぶことは、そのまま自分自身を尊ぶことで先祖をまつり、お墓を大切にすることは、即ち自分自身を大切にすることである。よく子供は親の後ろ姿を見て育つなどといわれます。既にお墓を持っている跡取の人などは、十分に我が子の前で、仏壇に向かう姿、墓前礼拝の姿、祖父母の末期、葬式の始めより終わり迄、子供も自然とその渦中に存在しているようです。

しかし、本家より分家した分家初代の人にはお墓もない、仏壇もない、およそ仏壇、墓前などで自分の親が、真摯なところで合掌し、額づき、至心に祈る姿など見た事はないでしょう。よく世間では、新しくお墓を買ったり、造ったりすると、家の誰かがすぐ入るなどといわれますが、浅はかな無知な人達の誤った言い訳です。そんな事を言う本人はどうかと言いますと、亡くなった後、定まった墓もなく、薄暗いロッカー式や、一時預かりの遺骨となって安定のない遺骨生活をおくらねばなりません。まさに「墓無い人生」となっています。どこの分家にも先祖は居られるから、今の自分自身があるのです。先祖は、田舎で兄さんが守っているからと言いますが、生まれ在所より遠く離れて現在のマイホームに住んでいる以上、近くに永遠に眠る地を定め、先祖の霊をお祀りする。そして、休日には一家揃って墓参りをし、先祖に感謝する。こんな家庭には、家庭内暴力、離婚、親殺し、子殺しの因など入り込むスキはまったくありません。又、いざ新仏が出たから墓地だ仏壇だと騒いでは新仏も仲々落ち着けないのではないのでしょうか。十王経や十三仏の世界に送られる新仏にとっては、現世の遺族の心のこもった供養が何より大切な事です。

現在、東京都内の墓地不足が原因で、近郊に民営霊園が多く出来ていますが、その大部分は、自分の住まいより電車で30分以上2時間以内というのが大部分です。群馬県高崎周辺では、まだまだ深刻な問題として、クローズアップはされませんが、核家族化が進んでいますので墓地不足問題もそう遠からず起こることは間違いありません。たしかに若いうちは、墓地と言ってもピンと来ませんが40代、50代となり近親者の死を迎える頃となると、より切実な問題となります。ご存知のように墓地は即ち土地であり土地は生産出来ません。このために墓地の価格も値上がりは必至と考えてよいでしょう。

高崎八幡霊園も今日では、ほゞ満杯であると聞き及びます。地域の共同墓地で新規に入れてもらうにも狭かったり、地形が悪かったり、隣地との折り合い、価格について面倒くさい問題、一族の共有墓地へ入れてもらうには長老、本家との関係、出来上がったお墓への苦情等、数え上げればキリがないでしょう。墓地購入については、一般的には建てる石

塔の向きは東、南、向きがよいが、若干向きの悪さは調整可能、面積は最低でも畳2枚(3.3㎡)以上は欲しいものである。

先日ある霊園見学バスに乗る機会があり、これから墓地を買うんだという人の話のなかに「マイホームを手に入れてホッとするのも束の間でもうひとつ、ついのすみかというべき墓地を手に入れこれでこの世とあの世の住宅問題を解決した事になった」この人などはお墓を住宅に置き換えて考えています。又30代の若い主婦は、「主人の田舎に大きなお墓があり田舎の父母は、その墓に入れば良いと言いますが、私は主人の家の墓には入りたくないし、私の子供もそんな遠くへは墓参りに行けないと言うし、何代も前の見知らぬ人の遺骨に囲まれて…とても考えられない。新規に墓を造って主人と二人きりで死後も暮らしたい」といっています。お墓に対する考え方も大部変わって来て、何かカラッとふっきれた明るさで墓を買い、生の世界と隣合わせの感覚で墓を訪れ、そしてそこに眠ってからも自分達が生前そうしたように明るい気持ちで子供達や孫達が、訪れてくれるのではないかと、一昔前の人達では、とても考えもつかなかったことであろう。

会社墓とはどういうものですかと聞かれます。これは、会社という組織の発展に貢献した物故社員や、歴代の社長を合祀する供養塔であり、取り分け高度成長期に一丸となって戦ってきたとう時代を経て精神的な和が求められだし、個人のお墓が家族で祀るのであれば全社員で社に関連した霊を祀り、心の依りどころとするのが会社墓である。現代の国内の有名企業、各種団体に非常な勢いで浸透しています。またそういう会社、団体の業績は伸び一途の発展を見ている。

話はがらりと変わりますが、皆さんは勿論子供を育てている育てた経験があるでしょう。その過程で困るのは「子の心親知らず」ではありませんか。最近の時の流れの速さでは、子供の心を理解できない親も相当数いるでしょう。そういう人達はせめてお風呂くらいは一緒に入り親子の絆を保つようにして下さい。お風呂の中では親も子供も裸の付き合いなのでお互いに隠す事なく話したり聞いたりします。又、子供は、親の後ろ姿を見て育つと言いますが、親は親らしくしっかりした自覚をもたなければなりません。親として大事なことのひとつは、自ら親の恩の尊さを知り、まず自分が親孝行を実践する。つまり亡くなった親に十分な供養をするのも、生きている親に孝行するのもすべて子供は子供なりに見えています。そして自ら墓に入った後に、自らしたのと同じ事を子供はしてくれるでしょう。釈尊が親の恩を説いたものに「父母恩重経」がありますが、そこで説かれた十恩のひとつに「くぎょうれんみん究意隣愍の恩」というのがありますが、それは「己れ生ある間は子の身に変わらんことを願う」というもので、親は生きている間は勿論ですが死んだ後でも我が子を護ることを願うものです。この親に現世に残っている子供は、何をしたらよいのでしょうか。現時点でお墓を買うか、石塔を建てるか、と考えている貴方達がやがては、墓に祀られる立場になります。その姿を自分の子供が見ています。ご決断を。 合掌

浄土宗檀徒の墓

浄土宗の本尊は阿弥陀仏です。その阿弥陀仏のこの世に現れたお姿が仏像であり、絵像であり、南無阿弥陀仏の六字名号である。即ち、極楽浄土の阿弥陀仏の分身です。この本尊様の六字名号を石塔に謹刻、入口の柱には、「光明遍照十方世界、念仏衆生攝取不捨」(阿弥陀仏の光明は全世界を照らして念仏の衆生を収め取りお見捨にはならない)と阿弥陀仏の功德を讃える経文の一節を謹刻する。まさに、この世の阿弥陀仏の浄土を表現したものです。このようなお墓に埋葬される仏様は至上の喜びを得て、遺族に感謝しているでしょう。

まず、墓参りの時には入口に立ち、柱に彫られたしょうやくもん撰益文を拝読し、念仏を唱える者は阿弥陀仏によって救われるものと信じて、阿弥陀の浄土である墓所への階段を上り、浄土の本尊を供養することによって、自家の仏にその功德が回向されるのです。ですから、亡き母の一年忌などで特にご回向したい時などは、「えこう其仏本願力 ごぶつほんがんりき聞名欲往生 もんみょうよくおうじょう皆悉到彼国 かいしつとうひ自至不退転」(その仏の本願力は、名を聞いて往生せんと欲すれば、皆悉く彼の国に到り、自ら不退転に致らん)即ち、極楽往生を願って念仏を唱えたならば、仏の本願の力によって、必ず往生することができ、再び退転することはないという意味で(塔婆などにも書き込まれておりますので墓へ行ったら気をつけて見られたら良いでしょう)この偈文を唱えた後で十念を唱えます。十念とは極楽往生を信じて「ナムアミダブ」と四回、一息入れて、「ナムアミダブ」と四回、九回目は「ナムアミダブツ」と、十回目は「ナムアミダブ」とゆっくり唱え深く頭を下げます。

現在の世の中、衣食住が満ち足りて政治家や文化人といわれる人々は声高に「心の時代」だとさげんでいますが、果たして本当の心の時代でしょうか。心の時代だから仏教だ、座禅だ、供養だ、お墓だと、表面ばかり取りつろわないうで、内面を見直した方が良いのではないのでしょうか。よく、このお墓は何百万円かかったなどといっている人がいますが、お金ばかりかけたって良いものは出来る訳がありません。自分の家の仏様が浄土宗の葬式によって送られたら浄土宗の教えを勉強し、仏様があの世で迷わないようなお墓をつくって祀るのが、良いお墓の第一条件ではないのでしょうか。又、お墓は自分が建立するのではなく、先祖あつての今日の自分がある。その自分がお墓を建立する事ができるのは、自分の力だけではなく、先祖あつての力であると考えるのが良いでしょう。 合掌

価値あるお墓

仏様のご縁によって草津町在住のお施主と会う。亡き新仏の初七日の頃である。

墓地は亡き主人が生前に町営霊園を買っておいたと聞く。ご遺族と仏様やお墓についての話を聞かせていただき、自分の意見も話す、大事な時間である。一応の話が終わって現地確認に及ぶ、向きは南向き2メートル×2.7メートルまず申し分ない。信仰心の厚い遺族のためにも、祀られる仏様のためにも立派なお墓を設計しなくてはと、心に誓う。

その家の根本をなすお墓を任される事は、重大な責任を感じずるものである。

プランを練るには明け方、4時頃から2時間、冷水にて身心を清め、施主の属する宗派のご本尊を念じながら、仕事を進める。僅か2時間であるが、雑念もなく集中力が持続できる時間である。これ以外の時間にはお墓のプランニングは出来ない。

重要な事は、三者一体の法悦感を感じずる事が出来るか否か。三者とは、祀られる仏様、開眼供養に導師をなさる僧侶、供養を修する人つまり施主で、この三者がそれぞれの立場で喜びの感ずることの出来るお墓を造りたいものである。

草津の仏様の菩提寺は、真言宗であるから、真言宗の葬送儀礼で送られている。真言宗の場合は入寂とか、入滅でなく成仏であって、生きとし生けるものすべてのものは、生命の根源である本尊大日如来の世界より発して、大日如来の世界に帰り、成仏を成し遂げるのであるから故人の霊が早く弥勒菩薩の浄土へ無事に戻れるよう南無大遍照金剛（弘法大師様）の慈徳をお借りしなければならず遺族もまた、教えに従い故人の霊の無事な還帰を願って功德を積むのが最良である。

この教えを形に表したのが今回の墓所である。

構造的には、寒冷地に施工するため、凍結ラインを重視し、冬場の水抜き、使用石種を厳選した上で完成したのは言うまでもなく、開眼法要で菩提寺の和尚様より格別なお誉めのお言葉を賜りました。

合掌

「墓地で感じた事」

仕事から墓地へ行く回数は非常に多いが、気づいた事を書きとどめておきたい。まずは石屋のプレートが目につきます。自分の店で造ったのだという証拠にと、〇〇石材店のプレートが墓所の入口に堂々と貼られています。お墓として考えてみると言語道断としかいえない。

聖域であるはずの墓所が石屋の広告媒体か。何を考えているのだろう。

群馬県内においては圧倒的に黒い石塔が多いが、最近はお墓に関する本やテレビ放送等で白い石塔も増加の傾向にある。しかし、石塔の色は諸説あるのであえて論じないが、彫られてある文字の着色については青、金色、その他、カラフルな色で染められている。黒石塔は表面にツヤがあるので彫ったままの色付けされていないのが主流である。たまには黒石塔にも目立ちたいのか、白色ペンキで文字を染めたものもある。これなどは何ともいえない。

開眼式で導師が筆に真黒な墨をたっぷり含ませて、いざ、開眼と石塔の文字に近づけると、石塔の文字は青かったでは！文字の件では、この他に五輪塔の梵字について一言。いいかげんな梵字が堂々と彫られているのが多く見受けられます。五輪塔に彫られている梵字は、その各々に、神智仏徳が、含蔵されますので正しい知識のもとに建立しなくては、折角の建塔供養も……特に十三層塔、五層塔、法篋印塔等を建立する場合には注意を要します。およそ、自分の家のお墓を建てようとする時には、まず第一に菩提寺の宗派は何宗であるのか、また教えは、ご本尊様はと、頭のなかに入れる事である。真言宗の檀家で寺墓地に墓所を造るのに戒名は浄土真宗の釈〇〇では、こんな時には事前に菩提寺の和尚に相談すべきである。又、真宗の檀徒であれば「歎異抄」に「親鸞は父母孝養のためとて一遍にても念仏申したること未だ候はず」とはっきり不廻向について申されています。罪悪生死の凡夫にとって弥陀の本願力以外、救われる道なしと説かれ、この絶対他力の立場より阿弥陀如来一仏思想を考慮した墓所を建てる事がよいのです。

開眼式の導師をなさって下さる和尚様に墓所へ来てもらった際、苦笑いされたり、導師の、法力をうけつけないような墓所は造るものではありません。

合掌

(最近の出来事) えっ! 極楽より長距離電話が?

確か本年の3月頃、展示場に年配のご夫婦が墓を作り直したいと、相談に見えました。まずその家の家系、因縁を詳細に聞いた上、ご夫婦と共に墓地を見せてもらうことにして見に行きますと、古い石塔が傾いていたり、他人の家の石塔がはいりこんでいたり、とにかく滅茶苦茶としかいいようのない有様です。まず一つ一つの石塔を掃除して、判読出来る文字を書き取った後、菩提寺へ行き過去帳を調べていただき、祀るべき仏様と区別をつけ、無縁仏は無縁の場所に整理をして、和尚さんに供養をお願いした後、墓所の寸法取り、地盤、方位、道路付等を調べた上で新墓所の設計を始めたのです。もちろん仏の成仏、解脱の導きとなる良雲型五輪塔も建てる様に設計しました。数回ご夫婦との打ち合わせの後、工事に着手して本年5月、開眼の運びとなり、開眼供養にはご招待いただきました。当日ご家族一同親類縁者十数人が集まり、菩提寺の和尚さんが導師となり開眼供養が営まれたのは申すまでもありません。永年の願いを果たされて大満足のご夫婦は、昼の疲れにより自宅でウトウトしていると、突然電話のベルが鳴りご主人が受話器を取ると受話器の向こうで亡き父の声「お前達の真摯な供養の御蔭で極楽浄土へ到着した。途中、五輪塔の四門が良い導きとなった。ありがとう」といって電話が切れた。「こんな夢を見ました。供養の心が通じたのですかねえ私達はこんな経験は始めてです。」と数日後来店された時にお話をききました。仏を供養した満足感からみられた夢でしょうが、素晴らしい夢です。このような心ある建塔供養のお手伝いができる事は、この上ない喜びです。

合 掌

「現代墓所考」

昔はお寺の門前には石屋さんがあり、朝から晩迄、コツ、コツ、コツと親父さんが加工をしている姿を見ることができました。

現在ではコンピューターと機械を組合わせ、無人化に近い工場なども出現し、加工部門などは海外で加工させて、日本へ持込んでいます。今、石屋業界も多難な時代を迎えトップは頭を痛めています。自分の店に何台か加工機械を並べて人を確保しても採算のとれない時代です。加工は加工、販売は販売、施工は施工と同じ業種のなかでも分業化の傾向も見え、自分で加工し、運搬し、建上げというパターンは減って加工機械はあっても動かさないで製品で仕入れるという石屋さんが増加しています。又原石、加工品共に輸入するため、海外への依存度が大きくなり、外からの刺激に敏感にならざるを得ません。本来から考えますと仏様の魂をお祀りする大事な墓所造りを現在のような状況下においてしまったのも人であり、この先、営々と続けて行くのも人でもあります。供養は心でやるものだといわれますが、その肝心な形にする部分をコンピューターという文明の利器がリードするようになり、ましては、何十年も前に亡くなった仏様などは現在のような外柵付の立派な墓所なぞ想像しなかったのではないのでしょうか。

昔の単独石塔を建てる時は何年か経って少々傾いても何という事はなかった。しかし、今の外柵付墓所などは明らかに墓所を総合的にまとめる技術力が必要であり、一定レベルの施工技術基準を定めないと、後年、問題が起こるのではないかと予測される。現に何百万もかけて造ったお墓がわずか二年でガタガタになってしまった。石塔に傷があった。傾いてしまった。誤字が彫られてあるが直してくれない。こんなケースをよく耳にします。施主の信をいただき、その家にとって大事な墓所造りを任されるのであれば最後の最後迄きちんと完全に仕上げ、引き渡しをするのが当然です。又、施主側で考えてみると、頼む前に納得いくまで聞き、できれば施工前例を見せてもらい、よく検討の上、見積書、仕様書施工図を揃え、契約書を取りかわしてから工事着工するのが安全です。

合 掌